

今
週
の
み
こ
と
ば

「再建の希望」

(エズラ記 3 章 1 節～ 11 節)

「こうして、主の宮の礎が据えられたので、民はみな、主を賛美して大声で喜び叫んだ」(3:11)

仲森文穂牧師

今日のメッセージ要旨

○紀元前 537 年、エルサレムに帰還した第 1 陣の人々が目撃したのは、崩れ落ちた城壁や神殿、荒れ果てた町の姿でした。今、能登半島でも同じ状況だと思っています。電気、ガス、水道などのライフラインもストップし、食事も足りず、暖を取るのも不自由で、あらゆる道路が寸断され、どう手をつけたらよいのか、ただ立ち尽くすのみ。まさに被災とはそういう状態です。しかし、彼らは立ち上がり、人々を町に呼び返し、瓦礫を取り除き、新しい神殿の基礎を築きました。まだ基礎だけなのに、みんなそれぞれに大声で泣いたり、はしゃいだりしています。

なぜでしょう。50 年にわたる捕囚の苦しみがあったからです。今やっと故郷を再建できる、シンボルとしてのエルサレム神殿の基礎がいま完成した、そういう万感胸に迫る思いが彼らの心にあふれたのです。しかし、再建工事が始まって間もなく、反対者の妨害などで工事は中断しました。目的を見失ったまま 18 年もの歳月が流れました。廃虚の神殿を人々はどんな思いで毎日眺めたのでしょうか。「今にきっと」と思う反面、廃虚の姿に日々慣れていく自分たちを悲しく感じる日々だったのかも知れません。

○人々が失望しかけた時、神様の御言葉が預言者ハガイとゼカリヤに臨んだのでした。神様がしびれを切らしてハガイとゼカリヤを旗振り役に任命されたのです。エズラ 5:1 以下に「ゼルバベルとヨシュアは立ち上がり、エルサレムにある神の宮を建て始めた。神の預言者たちも彼らといっしょにいて、彼らを助けた」とあります。そして 4 年後、神殿は完成しました。紀元前 516 年のことです。神様の応援があつて、復興が可能になったことを記憶しておきたい思います。

○本日は被災者を覚える礼拝です。元日の能登半島地震のあとボランティアも制限され、現地にも入れず、ただ祈るしかありません。でも東日本大震災のあと話題になった「風の電話」で高校生の女の子がこう話していました。「お母さん、いなくて寂しいけど、でも私、大丈夫だよ。いろんな人が私たちのこと応援してくれているから、お母さん心配しないでね」と。私たちがささげるものは僅かです。でも金額ではありません。それが「あなたのことを応援しています」という言葉となって、被災された方々の所に届くのだと私は思っています。

聖書の後日談によると、人々が貧しい中で建てた第 2 神殿は前のより見劣りがしたと言いますが、それは人の思いに過ぎません。ハガイ 2:9 に「この宮のこれから後の栄光は、先のものよりまさろう」と主は仰せになった、とあるからです。神殿再建には人々の民族復興の必死の祈りがありました。神様がそんな祈りを見過ごされるはずはないのです。神様は人々の献げ物をこの上なく喜んでくださったのです。